



CNN

EE

6

言いたいことが
ピッタリと決まる!

english express

June 2015

[特集]

「さくさくこなす」「きゅんきゅんする」etc.

この擬態語、 英語で何と言う？



[好評連載]

池上彰

「5分でわかる! イスラエル現代史」

クリストファー・ロイド

「水の誕生の謎に迫る」

[CNNビジネス・アイ]

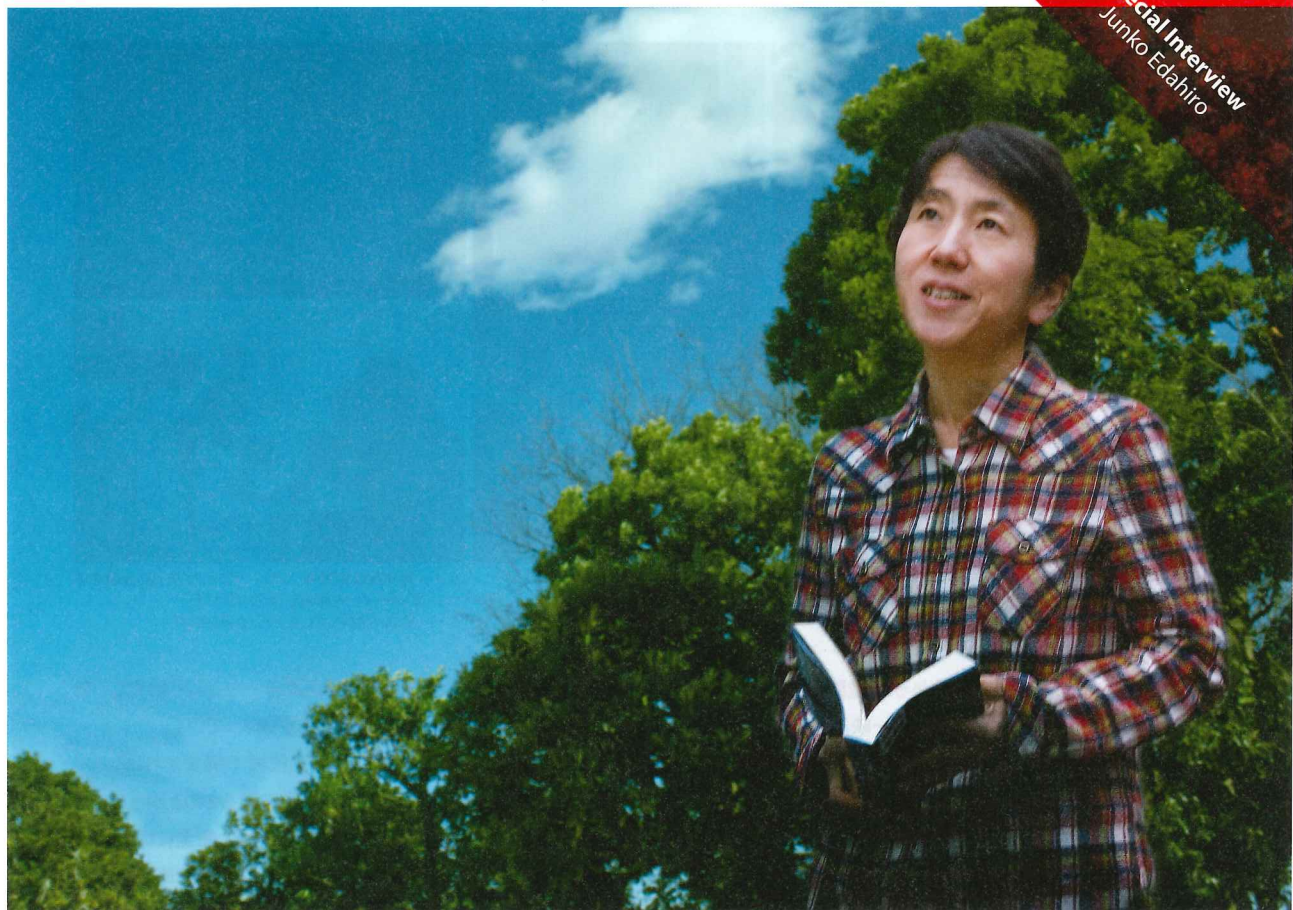
取り残された米国、日本
中国主導のアジア投資銀行
英独仏など57カ国が参加

[生録インタビュー]

知性と気品 実力派オスカー女優
ケイト・ブランシェット

[アンダーソン・クーバー360°]

ヒラリー、個人メール問題で
大統領選への影響は？



Step Forward >>>

ステップフォワード

同時通訳者、環境ジャーナリスト、 そして持続可能な社会への提案者

朝2時起きで苦手の英語をマスター

環境ジャーナリスト、翻訳家

枝廣淳子

枝廣淳子 (えだひろ・じゅんこ)

東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。2年間の米国生活をきっかけに29歳から英語の勉強を始め、同時通訳者・翻訳者・環境ジャーナリストとなる。環境問題に関する講演、執筆、翻訳等の活動を通じて「伝えること、つなげること」でうねりを広げつつ、人々に行動の変化を促す方法と変化を広げるしくみづくりを研究。地球環境の現状や世界・日本各地の新しい動き、環境問題に関する考え方や知見を「環境メールニュース」で広く提供している。つながりと対話によって、しなやかに強く、幸せな未来の共創をめざす。有限会社イーズ代表、東京都市大学教授。主な著書・訳書に『不都合な真実』（訳・ランダムハウス講談社）、『アル・ゴア未来を語る 世界を動かす6つの要因』（監訳・KADOKAWA）、『レジリエンスとは何か——何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる』（著：東洋経済新報社）など多数。



驚異的なロングセラー『成長の限界』の著者メドウズ夫妻が始めたバトン合宿に2002年より毎年参加、各国のシステム思考家・実践家と意見を交換している。中央がデニス・メドウズ氏



上—地球環境国際賞「ブループラネット賞」記念講演会でコーディネーターを務める(2014年11月)
下—英語と格闘していたアメリカ滞在時代

>> 自然の中で育った原体験から環境問題に関心を持つ

2007年に公開されたドキュメンタリー映画『不都合な真実』。クリントン政権で副大統領を務めたアル・ゴア氏が30年以上かけて調べ上げた環境問題、特に地球温暖化によって地球が直面している現実と、近い将来に直面するであろう危機を警告した問題作である。『不都合な真実』は、そのうち単行本としても刊行され、日本語訳も出版された。その翻訳を担当したのが、枝廣淳子さんだった。

「この本を翻訳したことが、私にとって大きな転機になりました。日本でも大勢の方に手に取っていただき、環境問題に対する意識を高めるお手伝いできたと思います」

『不都合な真実』の出版後、来日したアル・ゴア氏から「私は残念ながら日本語を読めないが、日本人の友は皆、とてもいい翻訳だと言っている」という謝辞を受けた。

枝廣さんは、現在、日本を代表する環境ジャーナリストとして活躍、英語力を存分に発揮してさまざまな形で世界とつながり、環境問題の根本となる経済活動や、真の幸せのための経済と社会のあり方について調査研究を重ね、持続可能な社会の確立を目指して国内外に広く情報を発信し続けている。

彼女が環境問題に興味を持った原点は、幼い頃の体験にある。父の転勤に伴って4歳で宮城県の小さな町へと引っ越し、ヤギに草をやり、山菜を採り、釣りをするなど、自然に包まれ、自然と親しくつながりながら育った。ところが、その後、成長する中で自然が壊されていくのを何度も目にし、次第に環境に対する意識が芽生えていく。

大学、大学院で心理学を学んだ後、アメリカ生活を経て通訳者になった。通訳者として環境問題の専門家が集まる会議

に出席するうちに、環境問題を自らのテーマとして研究し、自分自身の言葉で伝えたいという思いが強まっていく。

「何か事が起こったときに、何でも技術で解決すればいい、解決できる、と考える人もいますが、元に戻るものと戻らないものがあります。自然はいったん壊れてしまうと完全には元に戻りません。そのことを認識している人は、私のような原体験を持っていることが多いですね」

自分を育ててくれた豊かな自然を失ってしまう前に、人々に何らかのムーブメントを起こしてほしい——自らの原体験を心に刻み、環境ジャーナリストへの道を進みだす。

>> 「同時通訳級の英語力」を目標に独学で学ぶ

今でこそ同時通訳者として活躍し、国際会議で英語のプレゼンを行う彼女だが、29歳までは英語が大の苦手で、外国人を見たら逃げていたという。一念発起して英語に取り組んだのは、夫の留学で2年間アメリカ生活を送ることになったからだった。

「2年間で同時通訳者になる」という目標を立て、乳飲み子の長女を育てながら、ユニークな独学勉強法をいくつも編み出して、英語力を飛躍的に伸ばした。帰国後、半年間、通訳学校に通う。学費はビジネス翻訳の仕事で賄い、ビジネス翻訳に慣れると、次は出版翻訳へ。大学院時代にアルバイトした会社の縁で、翻訳しかつた本を出版できた。同時通訳者として仕事を得るためにも積極的に動き、国際会議に「ボランティアで通訳をします」と売り込んで、少しずつ実績を重ねていった。

「通訳として活動しだしたのが遅かったので、少しでもチャンスがあるところには、ためらうことなく手紙を出しました。その頃、アメリカの著名な環境活動家、レスター・ブラウン^{*}氏に、『環境問題に関心がある駆け出しの通訳者ですが、何かお手

伝いできることはありませんか』と手紙を出したんです。そうしたら、『今度日本に行くときに手伝ってくれないか』と返事がきて、そこから環境問題への道が開かれました。その手紙を出したのが人生のターニングポイントだったと思います」

以来、ブラウン氏を通じて、環境問題に取り組んでいる世界中の人々と交流を深め、情報交換や情報発信に努めてきた。特に、日本からの情報発信のために、活動のベースとして環境NPO、ジャパン・フォー・サステナビリティ (JFS) を設立。多くのボランティアの協力を得て、企業・自治体・市民による環境問題への取り組みなど多様な情報を収集、英語に翻訳してインターネット等で発信し、質量両面で高い評価を得ている。

さらに、日本に伝えるべき世界の重要な情報を翻訳するプロ翻訳家の養成に力を注ぎ、「トラたまコミュニティ」を設立。2014年9月からは東京都市大学の環境学部教授として、世界を変えられる人材の育成にもチャレンジし始めている。

世界を変えたいという思い・動きを作りだすことで、持続可能な社会の確立を目指す枝廣さんの活動は、今後も粘り強く続いていく。

※環境活動家。地球が持続的に発展していく選択肢として「ブランB=エコ・エコノミー」を提唱する地球環境問題の第一人者

Interview»

>> 毎日3時間、字幕付きでテレビを「聴く」

——英語はアメリカで、ほぼ独学で学んだそうですね。

枝廣 夫についてアメリカに行くことが決まり、英語を避けて通れない状況でした。どうせなら最も高い目標を立てようと思い、「2年間で同時通訳者になる」という目標を定めました。生後7カ月の娘がいたので、保育園に預けている時間と、寝ている時間を勉強にあてました。

目標は「同時通訳」でしたから、まず「同時通訳」とはどういう作業なのかを考えてみました。そうすると、「英語が聞こえる」⇒「文章の意味を理解する」⇒「日本語にする」⇒「同時にしゃべる」という4つの作業が必要だとわかりました。そこで、まず語彙を増やし、英語のスピードに慣れることが必要だと考え、そのためのトレーニングを始めました。

スピードに慣れるにはたくさん聴くしかないと思い、テレビを利用しました。アメリカのテレビ番組には、だいたい聴覚障害者用に字幕がついているので、文章を目でも確認できます。来る日も来る日も、最低3時間はCNNを中心にひたすらテレビを「聴いて」いました。最初はチンプンカンプン。本当に聞き取れるようになるか不安になることもありましたが、薄皮をはぐように少しずつ少しずつ聞けるようになっていきました。

語彙の強化に関しては、新聞・雑誌でわからない単語に出合ったら、赤線を引き、紙に書き出していきました。初めはわか

らない単語が多くて新聞が真っ赤になりました。単語を効果的に覚えるにはどうしたらいいか考えているうちに、学習心理学で学んだ「忘却曲線」のことを思い出しました。今日50個の単語を覚えても、時間が経つにつれて徐々に忘れていき、覚えている単語数は減っていく、というのが忘却曲線です。そこで、曲線が落ちたところで復習するシステムにすれば、語彙の定着率が上がるのではと考えたのです。夫はプログラミングのプロだったので、そのタイミングで復習できるプログラムを組んでもらって学習し、効果的に語彙数を増やしていきました。

——話す練習はどうやったのですか。

枝廣 それまでの私は、英語で話そうとしても口が動きませんでした。英語で口を動かす経験が少なかったためだと考え、聞こえてきた英語をオウム返しに繰り返す「シャドーイング」のトレーニングをしました。テレビの解説番組などを録音し、再生スピードを遅くして、毎日最低10分間はやりました。続けていくことで、英語のリズムにも、英語を口から発することにも慣れていきます。音読やシャドーイングは、スポーツでいえばランニングや素振りのようなもの。基礎練習として毎日続けました。

並行して「言いたい日本語を英語にする訓練」も行いました。日本から持っていった、簡単な単文が和英対訳で並んでいる教材を使い、「英文を隠し、和文を見て英語で言う」⇒「英文例を見て、自分の英文と比べる」という練習をしました。テンポよく、和文を見た瞬間に英語が口から出るように心がけました。全然できなくてイヤになると、1ページ選んで同じ文を何度も繰り返し練習しました。そうすると答えを覚えられるので、瞬間的に英文が出てきて気分がいい——子どもだましのやり方ですが、自分で機嫌をとりつつ続けていったんです。

>> 進歩を自覚できる工夫でスランプを乗り越える

——スランプはなかったのですか。

枝廣 英語に限らず語学を学んでいると、スランプに陥る時期がありますね。スランプとは自分の進捗が見えなくなっている状態だと思います。ですから、自分が少しでも進んでいることが自分に見える工夫しておくのが大事です。私は当時、英語の番組を見て何パーセントくらい聞き取れたかメモしていました。



以前に比べ、聞き取れた割合が上がっているとわかれば、少しずつ前に進んでいるのが感じられて、モチベーションは落ちません。語学学習は挫折しやすいですから、自分の進歩が自覚できるようにいろいろと工夫をすることが大切だと思います。

——独りで勉強していると、ついダラダラしてしまいがちでは？

枝廣 私の場合、リズムを作って勉強したのがよかったです。どうしたかという、自分で「学期」を作るんです。3カ月を1学期として、その学期の目標と重点的に勉強する内容を考え、学期の終了時には目標がどこまで達成されたかを自己評価しました。これで学習にリズムができ、緊張感が保てたと思います。そのせいもあって、この2年間のアメリカ生活で、同時通訳者になるという目標の8割ほどの英語力がついたと思っています。そして帰国後に通訳養成学校に通って、勉強と経験を積み、同時通訳者になることができました。

何かを「学ぶ」とときには、それを学ぶことで自分がどうなりたいかというイメージをはっきり持つことが必要です。英語の勉強といっても、読む、聴く、話すなど、どの力をつけたいかによって勉強法は違いますから、目標をはっきりさせて、そのための勉強法を考えることが大事です。勉強法を決めたら、プロセスを改善する方法であるPDC、すなわち「plan (計画) ⇒ do (実行) ⇒ check (振り返り)」というサイクルを回して行って、勉強法の成果をチェックし、改善を図っていくのです。そうすることで、効果的に勉強することができます。

>> 通訳の手法を使うことで翻訳時間の短縮を実現

——『不都合な真実』を翻訳されたときは、通訳で身につけた技術が役に立ったそうですね。

枝廣 そうなんです。あの本はかなりボリュームがあるのに、翻訳に与えられた期間は1カ月ちょっと。しかもほかの予定もあって、丸々翻訳に当てられたのはわずか4日間でした。そこで、翻訳スピードを上げるために、書く代わりに英語を訳しながら声に出して読み、録音しました。そして、音声を文字に書き起こしてもらってから文章を練り直すというやり方で翻訳しました。

翻訳するときに、目の移動で時間をロスしていることにも気づきました。「原文を見て訳を考える」⇒「キーボードを見て日本語を入力」⇒「画面上で漢字変換が正しいかを確認」⇒「原文に戻り、次に訳す箇所を探す」というように、何度も目を移動させることに時間を取られていたのです。そこで、通訳訓練の1つ、「sight translation」の手法を取り入れました。これは、原稿を見ながら意味のまとまりごとに順送りに訳していく訓練です。同じように英語を見ながら訳を読み上げていけば、目の移動がないので時間的なロスがありません。これを応用したことで、翻訳にかかる時間をずいぶん短縮できました。

——翻訳者の養成にも力を入れておられると聞きました。



左— 翻訳を担当したアル・ゴア元副大統領の『不都合な真実』
右— 最新の翻訳書は、『成長の限界』の主執筆者ドネラ・H・メドウズ氏による『世界はシステムで動く』（英治出版）

枝廣 世界には、日本に紹介されていない重要な本や考え方が、まだまだたくさんあります。残念ながら多くの日本人にとっては、そのまま英語で読むのが難しいので、日本語に訳すことで初めて大勢の人に読んでいただけます。アル・ゴア氏の本もそうです。今までに私が訳した本は30冊ほどありますが、翻訳はとても時間がかかる作業なので、自分1人ではなかなか数がこなせません。それで、「翻訳者の人数が増えれば、より多くの本が紹介できる」と思い立ち、6年ほど前から“トラたまコミュニティ”というものを立ち上げて、翻訳者の育成をしています。

“トラたま”とは、“トランスレーター（翻訳者）のたまごさん”という意味で、翻訳力をアップするためのさまざまなトレーニングを用意しています。メールのやり取りをベースに、環境とかエンターテインメントとか、コースによって課題が変わります。課題を翻訳し、メールで先生とやり取りすることで実力を養います。年に2回、「翻訳道場」を開いて、朝から晩まで私と一緒にみっちり翻訳をして、細かいところを指導します。

この活動の将来的な夢は、自分と同じくらい翻訳ができる人を250人育てること。1冊の本のページ数は250ページくらいのもので、もし250人の翻訳者が1人1ページずつ訳せば、1日で1冊の本が訳せることになります。そうすれば紹介したい本をどんどん翻訳することができる。それを実現しようと、翻訳ができる人を育成しているんです。

——少しの力でも、たくさん集まれば形になるということですね。

枝廣 環境問題もそうなのですが、何かを変えないといけないと思っていても、1人では変わらない、とあきらめてしまうことがありますね。でも同じようなことをやりたいと望んでいる人は、実は多いものです。ですから、私はいろいろな地域・人々の活動の情報を広く集めて、さまざまな方法で伝えるようにしています。ほかの地域や人々がやっていることを知るのはいいお手本になるし、そういうことができるということを知れば刺激になり、「じゃ、私もやってみようかな」と思いやすくなりますね。それが積み重ねることで、世界を変える動きができてくるのです。